

グループ箱庭療法の試み

岡 田 康 伸

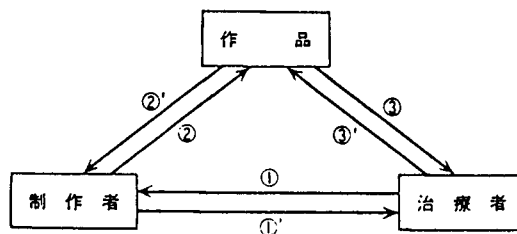
Group Sandplay Therapy

OKADA Yasunobu

問題と目的

箱庭療法が日本に河合によって1965年に導入されて以来、25年間が経過した。その間、事例による研究は、河合、山中を中心に、各大学の紀要（臨床心理事例研究（京大）、九州大学心理臨床研究など）や事例研究の書物（心理療法の実践、箱庭療法研究1～3など）に多くみられるようになってきている。また、基礎的研究も岡田（1984年）や木村（1985年）などがある。これらの研究とともに、この技法は、日本人に適した方法として、着実に普及していった。しかし、普及するにつれて、「クライアントが作れば治る」といったような箱庭療法を誤解して使用するものも増えてきている。このような状況で、グループで箱庭を作ることによって擬似的な体験ではあるがクライアントの制作過程を意識的に把握しようとした。かえって、誤解を生む恐れも大きい、制作過程への研究が必要な時期にきていると判断したためである。

クライアントは作品を作る時、はじめに全体的な構想があって、それに従って作っている場合と、玩具を置きながら少しずつ全体が出来あがっていく場合と、二つの方法が考えられる。後者はもちろんであるが、前者の場合でも、クライアントはひとつずつ玩具を置いていき、そのつど、その玩具から刺激を受けていると思われる。すなわち、ひとつの玩具を置いた時、全体の構想と合っているかを確かめるとともに、その玩具から考えてもいなかった刺激も受けることがあり得るといえる。またその時、立合っているセラピストの反応も、制作に影響を与えている。この関



第1図 制作者と治療者と作品の関係
意識的、無意識的に影響し合っている

係を岡田は1984年で第1図のように示していた。今回は、この関係をもう少し細かく分析しようとするものでもある。ある一人の制作過程を分析できればよいが、それは不可能に近い。そこで、

グループで、各メンバーが玩具をひとつずつ置いていく方法により、ひとつずつの玩具の意味を、メンバーがどのように受けとるのかを少しでも明らかにすることで、擬似的ではあるが制作過程に働く力動を分析することをひとつの目的とした。

今ひとつの目的は、イメージ拡大の訓練法としての、ひとつの方法を示すことである。すなわち、各メンバーは、置いた玩具の意図や、玩具から自分が受けた刺激などを制作が終ってから話し合う。こうすることによって、玩具の意味を知るとともに、イメージを拡大する訓練にもなると考えている。この方法は、今日資格ある臨床心理士が誕生し、今後、どのように、臨床心理士が訓練され、その技能を高めていくかが問題になっている時、ひとつの訓練法となりうるのではないかという試みでもある。

方法

一般的な方法は次の通りである。

① 4～5人でひとつのグループを作る。

② 各メンバーが玩具を原則として、ひとつずつ置く。この時、玩具を置くのはひとつしか許されていないが、例えば、「川に石」を置きたい時、「一巡目で川を掘り、二巡目で石をひとつ置き、三巡目でふたつめの石を置き…」としていたのでは、余り発展性がないと考え、「川を掘って、いくつかの石を置く」のも一動作と認め、一巡目で置くことを許している。

③ 一巡すると、そこでインスタントカメラで写真をとる。

④ 制作時間は30～40分間をめぐらし、あるいは、置く回数を4回～6回をめぐらし、立合人がどちらかの限界に近づいた時、ラスト一周を宣言する。

⑤ すでに置かれている玩具を棚に戻すことは禁止されている。しかし、箱の中で、玩具の位置を移動させることは許される。

⑥ 制作中は無言で、お互いの意図を話し合ってはならない。

⑦ 最後の人が置いてから、付加として、何か作品に手を加えることは認める。というのは、最後の人が作品をどのようにでも変化できるのでそれを少しでも緩和させるためである。

⑧ 制作が終った後、インスタントカメラの写真を並べて、過程を反すうしながら、その時感じていたこと、意図していたことなどを、立合人も入れて、徹底的に話し合う。この話し合いが、グループセラピー的でもあるし、治療者のグループ力動の理解にも役立つと考えている。

今回は上記の原則を守りながら、次のような方法で実施された。

① メンバーは4人であった。A：女性、20才代 B：男性、30才代 C：女性、30才代、D：男性、20才代である。

② グループ箱庭制作を原則として、一週間間隔で、7回試みた。その作品を示す。日時は、198X年9月～10月にかけてであった。

③ 制作後の話し合いは、メンバーの都合により40分程度しかとれないことが多かった。

④ 毎回の使用時間は約40分間制作に使い、話し合い約40分間で、計80分程であった。

結果と考察

〔第1回目〕

置く順番は、ジャンケンで決められた。A—B—C—Dとなった。第2図は第1回目の作品の制作過程を示す。

第1巡目：第2図の①は、1巡目の作品である。

Aが中央に島を作り、そこに木を1本置いた。Bは水の部分を広くし、左上と右下に木を1本ずつ置いた。「何か楽園を作りたかった」と言う。(感想や説明は後の話し合いで出てきたものである。) Cは左上の木の後に、お稲荷さんのキツネを置く。「何か楽しいところと感じた。キツネはめだたないようにしたかった」と。Dは「島が気になった。島と陸とどう関係づけるかが問題と思い、まず橋を置いた」と。「何となく、やりにくいなあ」と思ったという。橋が出てくるのは自然の流れだと思う。

第2巡目：第2図の②が2巡目で作られた作品である。

A「橋が置かれたので島に進入されるような感じになった。入って来てほしくないの、『来るな』ということで橋の下に剣士を置いた。」と。島を作った本人は、孤独を楽しみたい感じだったが、他のメンバーはその意図を受けられず、むしろ、いかに島と関係づけるか、あるいは、楽しい感じを出すか、などと少し違った受け止め方をしていたことになる。Bは魚を置く。「楽しいところを作りたいし、川があるから魚を置いた」と。Cは、「象は剣士に応じて置いた」と。島をどうするか、どう陸と関係づけるかを考えていた。象は剣士と対立するし、また逆に仲間みたくもあると。剣士は他のメンバーに、「あの剣を持っているのんたまらんね」といわせている。Dは、「家も必要だろう」と右中側(写真では木の上)に緑の屋根の家を置く。

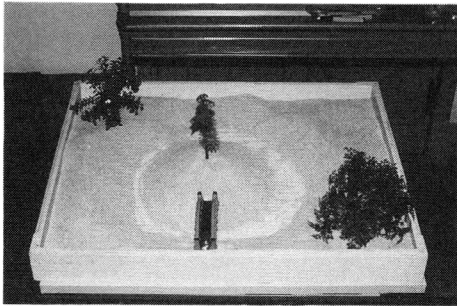
Aが作った島及び置いた玩具が作品をリードして作られていっている。Bは、「楽しいところ」を一貫してめざしている。

第3巡目：第2図の③が3巡目で作られた作品である。

Aは、「やはり入って来られるという感じで、これは、橋を壊さなければと思った。軽い気持ちで恐竜を2匹置いたが、(橋のところと右側の家の上)恐竜の足が橋にかかっているなど、すぐく迫力があって、これはしまったと思った。こんなはずではなかった」と。このコメントは、置いた玩具から、反作用的に制作者が刺激を受けていることをよく表わしていると思う。Bは、「恐竜を気にしないで、自分の楽園を作りたかったので、子ども2人(右上の木の前)置いた」と。子どもは、恐竜に誘発されて置かれたとも考えられる。弱々しいものを置くことで、恐竜のこわさを高めることもある反面、こわさをそぐ面もあると思う。すなわち、バランスをとる方法に、同じぐらいの強さ、重さを持つてくる場合(Cがすぐ、スーパーマンを置いた)と反対の性格を以てくる場合が考えられる。反対の性格のものが想像以上にバランスをとることができる。Cは、「恐竜に対抗して、やはり、ウルトラマンを置きたかったが、ないので、スーパーマンを置いた」と。「戦うためというよりも、子どもを守るため、怪獣が何もしなければ、戦いはない。弱々しい子どもが、強いスーパーマンを置かせたのかもしれない。」Dは「やはり島が気になるので、島の中に木を置いた」と。

第4巡目：第2図の④は、4巡目の作品である。

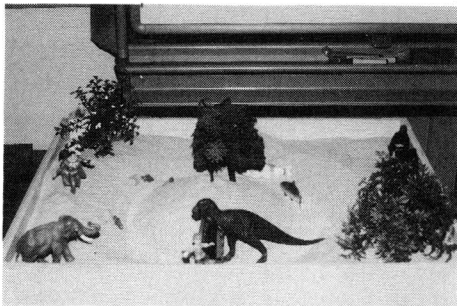
Aは、右上にコウノトリを2羽置く。「少し飛びあがってみたかった」と。Bは、「楽園にこだわっていて、まわりのことは気にしないでベンチを2個置いた」と。Cは、「箱庭を中央で切って左右分けたかったが、それもできないので、木を置いた。木はこの風景よりもっと遠いところ



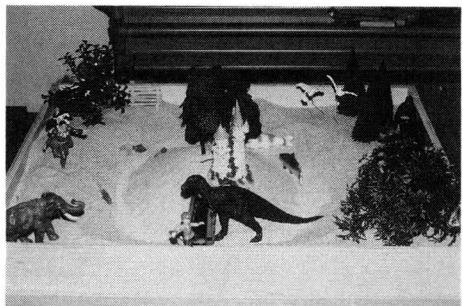
① 1 巡目の作品



② 2 巡目の作品



③ 3 巡目の作品



④ 4 巡目の作品



⑤ 5 巡目の作品



⑥ 別角度からの 5 巡目の作品

第 2 図 1 回目の作品の制作過程

岡田：グループ箱庭療法の試み

にあることを示したかった」と。この木は、コウノトリとうまく調和している。Cの言動はAを意識していたのではないと思われる。Dは、「島にこだわる。島に城を置いた」と。

第5巡目：第2図の⑤、⑥が5巡目の作品であり、これが最後の作品でもある。

Aは、「やはり外と話せるようにと思って、息づまるような感じもあったから、電話機を置いた」と。外との関係を認め始めており、Aの気持が、この作品の制作過程で変化したことがうかがえよう。Bは、「何か刺激されたのかなあ、象（上側）を置いた」と。何に刺激されたのか？Bは歩調を乱したようである。かたくなだったBの気持にも少し緩みが生じたのだろうか。Cは、「前の人が象を置いたので、すごいと思った。やはり島とどう関連づけるかを考えて、橋を2つ置いた」と。これで橋が三つになり、マンダラ的になった。マンダラにすることで二匹の象と二匹の恐竜が安定した感じである。Dは、「この城には鳥居と思って鳥居を置いた」と。

後の話し合いで中心テーマになったことは、島をどうするかであった。Dは、「よほど埋めてしまおうかと思った」と言ったのに対して、Aは、「埋められたら、再び掘らないで小さい木を円形に置いた」と言っていた。Aはどうしても、自分のとじられた領域が欲しかったようである。Aは、「すごい戦いや対抗を感じていた」と言い、「疲れました」と感想を述べていた。Aがリードした感じである。最初に何が置かれるかあるいは砂が掘られるかなどは、作品に大きな影響を与えるようである。

第1回目の置かれた玩具を整理したのが第1表である。

第1表 1回目で使用された玩具

制作者	巡目	1	2	3	4	5	合計
A	木		剣をもつ人 (ピーターパン)	恐竜2匹	コウノトリ2ワ	電話	7
B	木		魚	子ども2人	ベンチ2個	象	7
C	お稲荷さんのキツネ		象	スーパーマン	3本の木	橋2梁	8
D	橋		家	木	西洋の城	鳥居	5
							27

他人の玩具を移動させることは今回ではみられなかった。この回の作品のテーマは、Aは、「ある島の物語」Bは、「恐怖」Cは、「世界あるいは象のいる風景あるいは風景」Dは、「島」をあげていた。

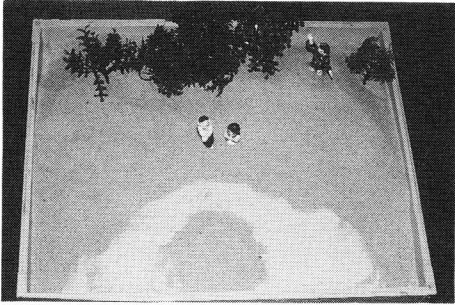
(また、誰もがいろいろな順番を経験することも必要であろうということで、以後は、経験していない順番をジャンケンで決めていくことになった。)

〔第2回目〕

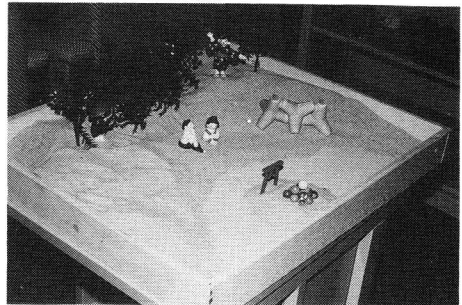
2回目の順番は、B—A—D—Cに決まった。第2回目の制作過程を示したのが第3図である。

第1巡目：第3図の①は1巡目の作品である。

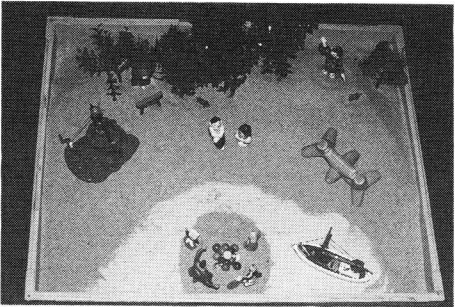
Bは島を作り、左右上に1本づつ木を置く。「今回はぜひ楽園を作りたかった」と言う。Aは中央に子ども2人を置き、右上に女の子を置く。「疲れているので、今日は反抗すまいと思っていた」と言う。Dは中央上側に木を2本置く。「3番目は作り易い感じ。流れに乗っていると玩具が自然



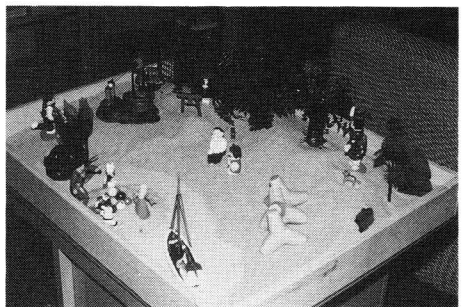
① 1 巡目の作品



② 2 巡目の作品



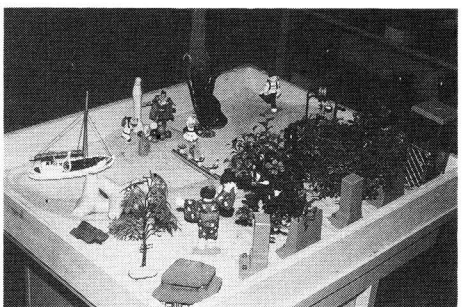
③ 3 巡目の作品



④ 4 巡目の作品



⑤ 5 巡目の作品



⑥ 別角度からの 5 巡目の作品

第 3 図 2 回目の作品の制作過程

と決まってくる。皆に反撥しようとも思っていなかったが」と。Cは左下にヘビを埋める。「ヘビの尾だけでも出しておこうかと思ったが、やはり埋めた」と。メンバーのコメントは前回の作品の影響を少し受けていることが伺える。立合人は島とヘビが今後の作品に影響を与えそうに思った。

第2巡目：第3回の②は2巡目の作品を示す。

Bは左上に僧侶を置く。「ヘビを意識したと思う」と。Cは、「Bが置きに行く時、ヘビを意識しているなあと思えた」と答える。Aは鳥居を島に置く。「やはりこの島は特別な（聖的なという意味か？）ところだし」と。Dはテトラポットを置く。「海辺で、こういう景色を思い出して、テトラポットがあってもおかしくないし」と説明した。Cは14個のビーダマを積んでいく。「鳥居があるし、宝物のように積んでしまった。はじめはビーダマをまき散らすつもりだった」と。メンバー全員のイメージが合ってきている感じだが、AとCのビーダマへの思いの違いのように微妙に違ったものもある。

第3巡目：第3回の③は3巡目の作品を示す。

Bは犬2匹を中央上と右上の女の子の前に置く。Aはスーパーマンと4人のメルヘン的な子ども（お姫さんもいる）を置く。「ビーダマを置いてもらったので、ディズニーランドのような楽しい、子どもの国にしたかった」と。聖的な島がディズニーランドのような遊園地に変化した。Dは船を右下に置く。「橋を置くと、前回のようになるし、船なら認められると思って」と言うのに対して、Cは、「船は難破させようかと思った」Aは、「そう、何か壊したい。でも我慢した」と言っていた。Cは井戸を置く。「ヘビが気になっていて、誰も掘り出す人がいないので、自分で掘り出そうかと思ったり。掘りおこす人がいないので、代りに井戸にした」と。ヘビが地下から地上に出てきてほしいと思っているようだ。他のメンバーもヘビを意識していると思うが、表面的には反応していない。

第4巡目：第3回の④は4巡目の作品を示す。

Bは日本風の家を3軒右上側に置く。「田舎風にしたかった」と。Aは大ナマズと海藻を左下に置く。「海を感じを出したかったと。海にナマズはおかしいが」と説明した。Dは電話ボックスを左上に置く。「こういうところに行ったが、風景として電話があってもいいと思う。走っている人は、左下から走り込んできた感じ」と言う。Cは柵で電話ボックスを囲む。「電話ボックスは近代的だし、かなんから柵で囲んでおいた」と。電話ボックスを埋めて、なくすのではなく、柵で囲むことで、玩具の影響を減じさせようとしているのは興味深い。

第5巡目：第3回の⑤、⑥は5巡目の作品を示す。

Bは木の間に観音を置く。「何か置きたくなって」と。前回に、象を上側に置いたのと何か似ている。最後に、大きな玩具をドカンと置いて、全体に重味をつけている感じである。Aは橋を置き、その上に島に向っている鳥を4羽置く。「島と陸とつながったかった」と。Dは、「前回と違って」と問うと、Aは、「誰かが早い回につないでいたら、前回のように『だめ』と拒否したかもしれないが、この回ぐらいになると、まあいいかという気がする。鳥はチョコチョコと渡ってくる。島から子どもたちを誘うというか、子どもたちのために来ている」と。制作過程の間にも当然気持ちの変化があることを示しているコメントである。Dはマリア像を島に置く。「観音像を意識した。島の方は西洋的だし、マリアにした」と。Cは墓を4つ置く。「ヘビもいて、お坊さんもいる

し、観音さんも置かれたので、墓を置きやすくなった」と。他の玩具が置かれていくなかで、墓を置くことが決まったようだ。この回に使用された玩具は第2表である。

第2表 2回目に使用された玩具

制作者	巡回目	1	2	3	4	5	合計
B		木2本	僧侶	犬2匹	家3軒	観音像	9
A		子ども3人	鳥居	スーパーマンと4人の子ども	大ナマズと海藻	橋と鳥4ワ	16
D		木2本	テトラポット	船	走っている人と電話ボックス	マリア	7
C		ヘビ	ビーダマ14個	井戸	柵	墓4つ	21
							53

第2回目の感想として、Cは、「他の人が何を置くか1回目の時程気にならなかった。1回目は、知らない人ということもあって、誰が何を置いたかをすごく敏感に感じていたけれども」と言っている。立合人としては、誰かが置いた玩具を受け止めてくれるという気持ちが出ていて、気楽に置いている感じを受けた。「4人が1つになっていく。新鮮な出会いを感じた」と言った人もいた。Dは、「3番目はやりやすい。流れに乗っていると、何か自然と玩具が決まってくる感じだった。でも、皆とイメージが違っていたのかなあ」ともつぶやいていた。Cは、「ヘビを置いて、他の人がもっと反応してくれるかと思った。僧侶とか観音像はヘビをどこかで意識していると感じられた」と感想を述べていた。

テーマとしては、Aは、「子どもの世界」あるいは、「空想」、Bは、「子ども」、Cは、「夢の続き」あるいは、「夢がやってきた」、Dは、「迎える」あるいは、「来る」をあげていた。

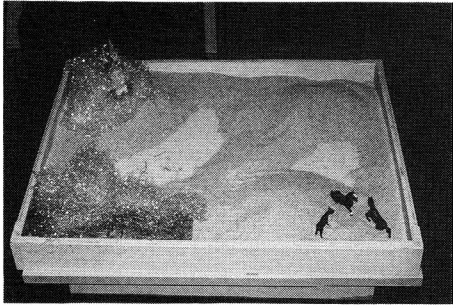
〔第3回目〕

第3回目の順番は、D-C-B-Aと決まった。第3回目の制作過程を示したのが第4図である。

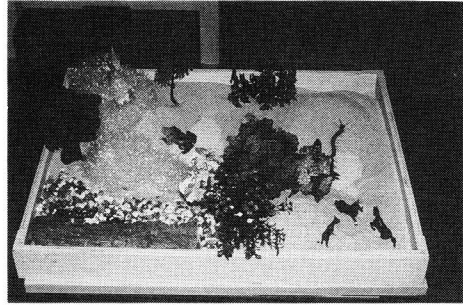
第1巡回目：第4図の①は1巡回目の作品である。

Dは、2つの池を作り、左上に城を置く。「出来るだけインパクトが柔らかいように、前みたいに島にしないように、池を2つ作った」と言う。他のメンバーの感想も彼の意図通りやりやすかったであった。Cは、左下に木片を置く。「前回のことがあるので、余りまわりを見ないようにして、この板を置いた。私に近づいてくれるなあという感じであった」と。Bが、「確かに拒否していると感じた」と言ったように、他のメンバーもCの気持ちを理解していた由、後で述べられた。Bは、馬を右下に2頭と右上に1頭に分けて置く。「余りイメージが湧かなかったので、とりあえず馬を置くことにした」と言う。Cは、「Bは距離を感じさせるとともに、関与されない安心感もあった」と言う。「Bは他者を安堵させるものがあるのかも」とも感想を述べている。Aは、馬を右下に集めて、左下と左上にモールのようなものを置く。Aは、「砂漠という感じがしたので、それならカスミのつもりでこれを置いた」と。Cは、「Aはいつも何かを感じさせてうれしい」と言っている。立合人は、全体に美しく、静と動がうまく調和していると思う。あたかも一人で作っている感じを強く受けた。

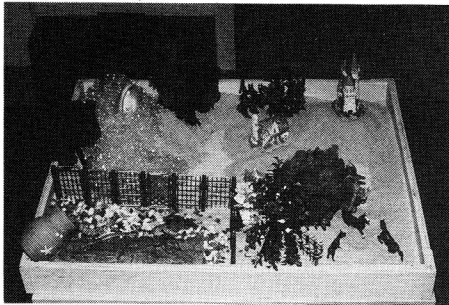
岡田：グループ箱庭療法の試み



① 1巡目の作品



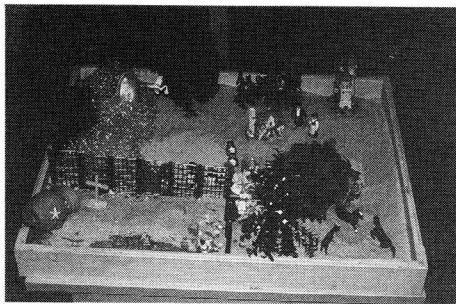
② 2巡目の作品



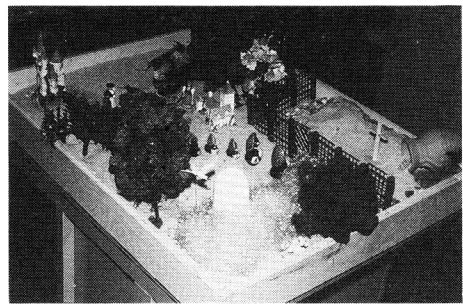
③ 3巡目の作品



④ 別角度の3巡目の作品



⑤ 4巡目の作品



⑥ 別角度からの4巡目の作品

第4図 3回目の作品の制作過程

第2巡目：第4図の②は2巡目の作品である。

Dは、木を左上に2本と中央手前に2本の計4本置く。「何か生きているものと思って、木で飾った」と言う。Cは、左下に小石を多数置く。「砂だけだとかなんので、石を置いた」と言う。立合人は、石が置かれたことで、今まで自然だったのに、人工的になったと思った。Bは、2つの花と中央上側に花の咲いている木を置いた。「無彩色なので、彩色したくて」と言う。Aは、ムカデ、カエル、クモ、青ムシを置く。「余りに、きれいになったので、こういうものを置きたくなかった。これらは、私の子どもでもある。仲間に入れて欲しいという気もあった」と言う。Cは、「子どもときいて、まあ、このようなものがあってもいい気はするが、とてもじゃないが、こちらに来て欲しくはない」と。

第3巡目：第4図の③、④は3巡目の作品である。

Dは、置かれていた城を右上に移動させ、その跡にマリア像を置き、その横に木を置く。あとの説明で、「霧に包まれたので、城はもう少し遠くにあってもいいだろうと思った。霧があるから、マリアは余り目立たないと思ったので置いた」と述べていた。Cは、ムカデ、クモなどを埋め、柵で木を囲む。「やはり入って欲しくないということで、柵をした。今回はこういうものは扱えないので埋めた」と。Cの気持ちをめぐって次のような会話が合った。Aは、「でも、ムカデなどは、私の子どもだし」Cは、「えっ？子どもですか。わかっていたら、もう少し工夫したかもしれない。でも、今日はだめでしたね。誰も入って欲しくない。」Bは、「柵が置かれたので入って欲しくない気持ちは、よくわかった。」Aは、「でも、入口があったでしょ。入って欲しいのかと思うし。(柵の中に戸が入っていた。)」Cは、「ええ、偶然柵をとったら入っていた。除こうかとも思ったが、手に取ったのに、入っていたのだからそのままにと思った」偶然かもしれない。たとえ、入ってきて欲しい気持があったとしても、Aがそれを受けとっており、「入って欲しくない気持」はBやDが受け入れている。2つの気持がたとえあってもそれぞれのメンバーが違う受け止め方をするから、グループでは受け入れられることが可能であり、これがグループの利点であろう。Bは、家を2軒置く。「家もあってもいいと思って」と。立合人は、Bがいつも穏やかなのが、他のメンバーの救いになっているように感じた。Aは、Cによって埋められていたムカデなどを掘り出し、左下に置く。また、それらの巣のような感じで、土器を左下に置く。「やはり、入っていきたくて。埋められたままでいたくなかったし、この住み家(土器)を置いたら、まあ、いやがられることも少ないかと思って。この中に入れておこうかとも考えたが、穴があいているし、同じだろうと思って」と。Cは、「そうです。この土器は、下に穴があいているし、虫は出てきますよね」と応じていた。

第4巡目：第4図の⑤、⑥は4巡目の作品である。

Dは、左上の木にコウノトリ2羽と池に水鳥を2羽置く。「まあ、何となくコウノトリは似合うと思って」と説明した。Aは、「下の方が静かな死の世界だし、何かうまいなあ(コウノトリは生を示すから)と思った」と言う。Cは、ムカデなどに、砂をかけて埋めてしまい、その上に十字架を置く。「もういいかげんにしてほしいという気持。1人で死ぬのではなく、一緒に死んでもらいましょうと思って埋めた」と言う。Bは、人間を右上に2人、やや下に1人の計3人を置く。「まあ人を置いて」と。Aは、6匹のタヌキを柵の方に一列に並べて、行列してきているように置く。「折角の子どもが死んだので、お弔いと思って。人は置きたくなかったし、タヌキはいいで

岡田：グループ箱庭療法の試み

すね。異次元から来たことも示したかったので、タヌキがよかった」と。立合人は、「こうドンドンと戸を叩いて、中の人（ムカデなど）をよみがえらせるような感じですね。」Aは、「ええ、この先頭の人（タヌキ）はそういう感じがありますね。」立合人は、時間もきたので、4回で、切ることにする。（4回目を始める時に宣言している。）Cは、もう1回まわして欲しかったと言っていた。だんだんメンバーは大胆に、自由になってきているように思う。作品も一人で作ったといえるぐらいに、まとまりがある。Dは、「女性2人（AとC）はしんどかったのではないか」と言う。Bは、「2人のやりとりの中には入れなかった」と感想を述べている。Bはおとなしく、皆のために置いているみたいという。他のメンバーとのつなぎ役になっている。日常生活でも、自分を主張するのではなく、つなぎ役的なところがあると言う。また、立合人が「3個置くことが多い」と指摘すると、Bは、「そうですね」と受けていた。Dは、皆をリードするように置いていく。「1番目が1番置きやすかった」と言っていた。置く順番とグループでの役割は関係してくるのかもしれない。使用された玩具をまとめたものが第3表である。

第3表 3回目に使用された玩具

制作者	巡回目	1	2	3	4	合計
D	城		木を4本	マリアと木	コウノトリ2羽と水鳥2羽	11
C	木片		石多数	柵	十字架	10以上
B	馬3頭		花2こと花の木	家2軒	人間3人	11
A	霧を示すモール		ムカデ、カエル、クモ、青虫	土器	タヌキ6匹	11以上
						43以上

テーマとしては、「タヌキの訪問」「元気を出して」「静か動」「コントン」などが出ていたが、「元気を出して」に決まった。

〔第4回目〕

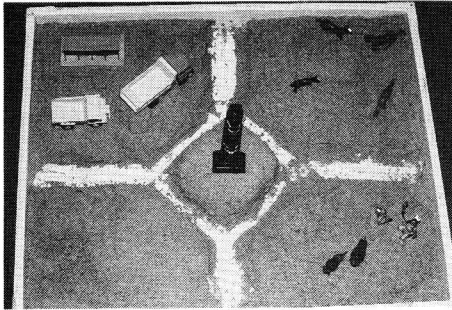
第4回目の玩具を置いていく順番は、C—D—A—Bと決まる。第5図は第4回目の制作過程を示したものである。

第1巡回目：第5図の①は1巡回目の作品である。

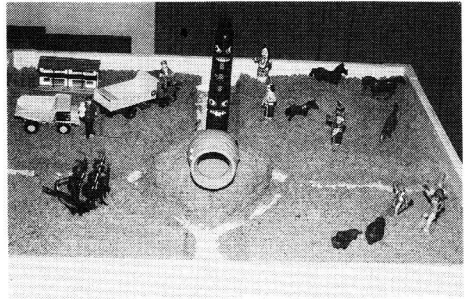
Cは、中央に島を作り、上下左右に分けて5つの領域を作る。「水を入れてよいか」と許可をとり、水を入れ、各々を固める。トーンポールを中央に立てる。メンバーが4人で、領域が5つあり、それぞれどこに置いてもいいが、領域をまたがっては置きにくい感じがした。また、どのように交流がおこるか関心深く見守っていた。Dは、左上に自動車2台と建物を置く。Aは、右下にインディアン2人と野牛2匹を置く。後の感想で、「ここは砂漠にして、茫漠としたイメージにしたかった」と言っていた。Bは、右上に4匹の馬を置く。「左下はCに残しておくべきだと思ったので、右上に置いた。それぞれの領域が決まった感じだ」と後で説明した。

第2巡回目：第5図の②は2巡回目の作品である。

Cは、左下に船を座礁したように置く。Dは、左上に、2人の人間を置く。1人はトラックに坐っており、中央のトーンポールをみているようである。Aは、中央に土器を置く。「他の人の



① 1 巡目の作品



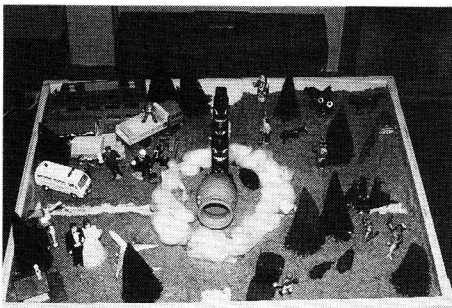
② 2 巡目の作品



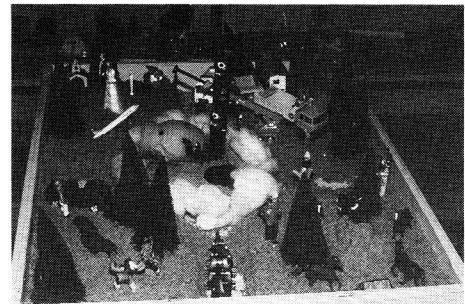
③ 3 巡目の作品



④ 4 巡目の作品



⑤ 5 巡目の作品



⑥ 別角度からの 5 巡目の作品

第 5 図 4 回目の作品の制作過程

領域には置きにくかった。でも中央なら許されると思って、まず中央に置いた」と。Aは始めに置いた右下を自分の領域とし、そこに留まるだけでなく、他の所へ置きたがっているが、まだ置けないので、中央に置いたと言う、中央が皆の領域と感じられるのは興味深いと思う。Bは、右上にインドの神を3体置く。

第3巡目：第5図の③は3巡目の作品である。

Cは、中央に飛行機が墜落したように頭から地面に突っ込ませて置く。Dは、右上に人間を2人と草を置く。Dは、「飛行機は不自然なので取ろうかとも考えた」と感想を述べていた。Aは、溝に木を10本置く。他の領域の区分がこれで緩和された感じである。Aは他の領域に進出したいのだろう。Bは、石を中央と左下へ置く。他人の領域への侵入をBが初めてする。積極的なBの側面が出た。Aが他の領域に置きやすいように準備をしてくれたとも考えられよう。Bが侵入してくれたことに他のメンバーはほっとしたという。「Bこそが侵入するのに適していたと。日頃から穏やかだし」と言った人もいた。石を置いたのも自然だったと思えた。石は、象徴深く、意味ある側面と、路傍の石ころとして、意味ない側面があるから、人の領域に侵入していく玩具としては、適していたのであろう。たんたん一見何ごともなく、進んでいった。

第4巡目：第5図の④は4巡目の作品である。

Cは、お化けの首を右上に置く。「この玩具が気に入って、置きたかった」と言う。Bが左下と中央に侵入したお返しの意味もあったかもしれない。Dは、左上に溝にあった木を3本移動させる。そして、大きな建物を置く。また、左下にマリアを置く。Aは、溝に砂を入れて、上と下側の左右と右側の上下をつなぐ。(左側の上下はつながっていない)船を起こし、左下に花嫁、花婿の人形を置く。Bは、右下にジープと女性を置く。

第5巡目：第5図の⑤、⑥は5巡目の作品である。

Cは、角笛を吹いている小人を左下に置く。船を右側の溝に移動させる。Dは、リフトカーを左上に置き、それを動かしているように人も移動させる。また、救急車も置く。「飛行機の墜落が気に入らないので、起こそうかとも思った。そうしないで、リフトカーで持ち上げるようにした」と後で説明していた。Aは、綿を中央の周りに置く。「各領域を結合するものとしてこういうもの(綿)が欲しかったし、遠いところにある感じも出したかった。」さらに、飛行機を左下に、溝の木も各々の領域へと移動させる。Bは、家を左下と右上に1軒づつ置く。

時間も30分をオーバーしたので5巡目で終る。

第4表 4回目に使用された玩具

巡回目 制作者	1	2	3	4	5	合計
C	トーンポール	船	飛行機	オバケの首	小人	5
D	トラック2台と 建物	2人の人	2人の人と草	家とマリア	リフトカーと救 急車	12
A	2人のインデア ンと2匹の野牛	土器	10本の木	花嫁花婿	ワタ	17+α
B	4頭の馬	インドの神を3 体	2個の石	ジープと女性	家を2軒	13
						47以上

使用された玩具は第4表にまとめた。

主な感想は次の通りである。「3巡目は、今までのまとめと次への準備の感じがした。」「前半は静で、後半は動の感じがした」「トーンポールは男根のイメージであり、最初から出ていて、何か支配されていたみたい」

箱全体を使用するというよりも、各領域をどうするかに限定され(Dが置いた領域は左上のみ)しており、各メンバーの行動は制限されていたようである。Cの圧力がかかっていたともいえる。しかし、前半は、その圧力に屈しているが、少しずつ反撥していく過程が興味深かった。この反撥の感じが、グループダイナミックスの表われとして捕えることができよう。

テーマとしては、「各人の領域」「4つの世界」「潜在した太古」があげられていた。

〔第5回目〕

各メンバーがすべての順番を経験したので新たにジャンケンで決めることになる。第5回目の順番は、D-B-A-Cに決まった。第6図は第5回目の制作過程を示している。

第1巡目：第6図の①は1巡目の作品である。

Dは、川を作り、右上4分の1と左下4分の3ぐらいの広さに箱を2分する。右側には池も掘る。そして、池のまわりに木を2本置く。「最初は、充実した感じでおもしろかった」という。Bは、左上に人と木、右上にも木を置く。どちらの領域にも置く。Aは、池の手前に大きな木を置き、木の下にパイプをくわえた老人を置く。「この人形が気に入った。すごく置く気になった」と言う。Cは、右上にマンモスを置く。どこに置くかは少し迷ったようだった。

第2巡目：第6図の②は2巡目の作品である。

Dは池にカメを置き、草を3つ置く。「草はマンモスが遠くにいるような感じを出すために置いた」という。マンモスは各メンバーにそれ程重荷にならなかったらしいが、少し困って、その表われとして、草で囲い、少し遠い感じを出したらしい。Bは、左上に家と丸太を置く。穏やかに置いていく人である。Aは、Bに応じるように中央下側に家と犬を置く。Cは、右下に釣りをしている人を置く。Cは、この小人シリーズの人をよく使っていると思う。

2巡目までは、各メンバーは、ほとんど時間を使わず、すばやく制作する。玩具はまだ少なく、いろいろ迷うことが少ないらしい。玩具が多く置かれてしまうと、何かと気になって、時間を使うようになる。

第3巡目：第6図の③は第3巡目の作品である。

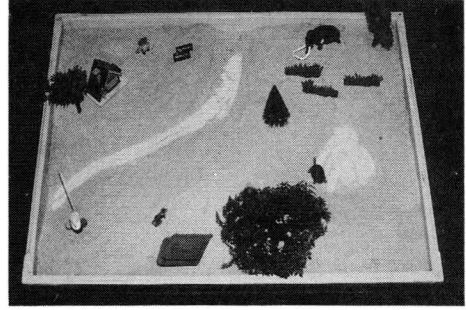
Dは、木を2本と魚2匹を置く。池が生きてきた感じである。Bは、右上に牛2頭とヤギ1匹と川に石を3つ置く。石は橋の代りのつもりだったらしいが、他のメンバーには川の流れを止めている感じを与えたようである。Aは、右下に水車小屋を置く。釣り人とどういう関係にするか迷っていたが、小屋を川下にした。Cは、ビーダマを5個づつ積んで、4隅に置いていく。Dは、このビーダマを「何か不思議な感じだった。神聖なものを感じた」と感想を言っていた。Cもそのようなものを表現したかったのかもしれない。

第4巡目：第6図の④は4巡目の作品である。

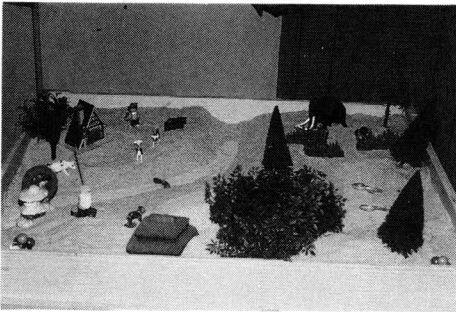
Dは、牛1頭、馬1頭、水鳥2匹、ニワトリを置き、池の魚を川に移動させる。Dは、積極的に動いている感じである。Bは、大きな木を左上に置き、魚を再び池に戻す。Aは大きな2本の木に各々1羽づつの鳥をとまらせ、川辺に3羽の鳥を置く。Cは、右下に寝そべっている人を置



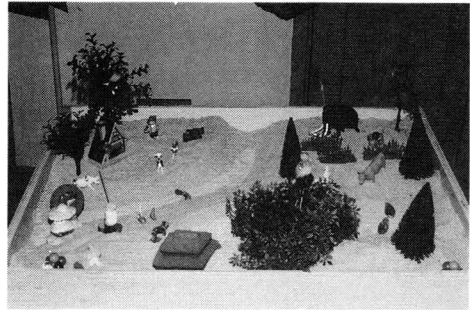
① 1 巡目の作品



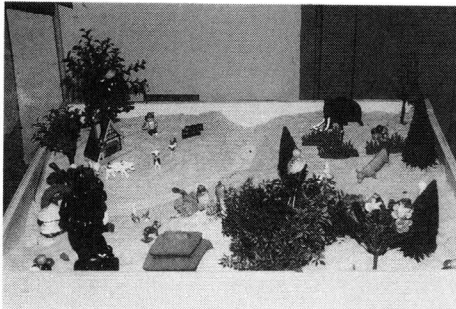
② 2 巡目の作品



③ 3 巡目の作品



④ 4 巡目の作品



⑤ 5 巡目の作品



⑥ 別角度からの 5 巡目の作品

第 6 図 5 回目の作品の制作過程

く。

第5巡目：第6図の⑤、⑥は5巡目の作品である。

Dは、池のそばに、マリア像と、ライオンを置く。ライオンは犬のつもりだったらしいが、玩具としてはライオンである。Bは、花を左側中頃と川のそばに置く。Aは、川のそばの花を右下に移動する。(パイプをくわえた老人の前に)ダイコンとニンジンと藻を5つ置いて、畑のようにする。Cは、仁王を左下に置く。

置かれた玩具をまとめたのが第5表である。

第5表 5回目に使用された玩具

巡目 制作者	1	2	3	4	5	合計
D	木2本	カメと草3つ	木2本と魚2匹	水鳥2羽とニワトリ, 牛, 馬	マリアとライオン	17
B	木2本と人	家と丸太	牛2頭とヤギと石3個	木1本	花を2輪	14
A	大きな木と老人	家と犬	水車小屋	鳥5羽	ダイコン, ニンジン, 海藻	13
C	マンモス	つり人と丸太	ビーダマ20個	ねている人	仁王	25
						69

Dは、最初に置くのは2回目だが、方向性を出さないようにと考えたという。他のメンバーはDが最初に置くと何か置きやすいといていた。作品の過程は、起承転結となる感じである。いつも置かれていた、ドキッとするような玩具がなく、刺激が少ない印象であった。

テーマは、「小川のほとり」が提案されただけなので、それに決まった。

〔第6回目〕

この回の順番は、B-C-D-Aに決まった。第7図は第6回目の制作過程を示している。

第1巡目：第7図の①は1巡目の作品である。

Bは、中央を池にし、左右下側と左上に木を1本づつ置いた。Cは、池に島のようなもの(陸とつながっている)を作り、実のなる木1本を置く。Dは、池に魚を2匹置く。Aは、ラクダを3匹右上に置く。

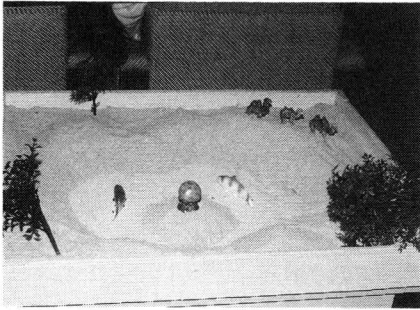
第2巡目：第7図の②は2巡目の作品である。

Bは、馬を3頭左下に置く。Cは、左上に落とし穴(後で本人が言った)を作り、その中に苔むした石を置く。Dは、上側中央にオスライオン2匹とメスライオン2匹を置く。(積極的な、力強い感じが出ている。)Aは、右下に家とヨセフとマリアの像を置く。「これは気にいったから置いた」と言う。各メンバーともに置くのが早い。メンバーが知り合いになってきたので、前半は判断よく玩具が置けるようである。

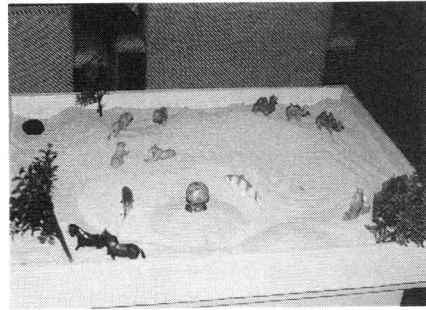
第3巡目：第7図の③は3巡目の作品である。

Bは、Aの置いた横(右下)に家とお爺さんを再び置く。似たものが並んで置かれた。Cは、右上を掘って、戦車と自動車とトラを埋め、少し高くしてその上に象を置く。「象は置き物のつもりだった」と後で言う。Dは、天使を島に置く。(木のうしろになる)。Aは、左上に戦車と兵士6人を置く。「不安に怯えているのを示したかったから」と言う。このコメントは戦車の意味と少

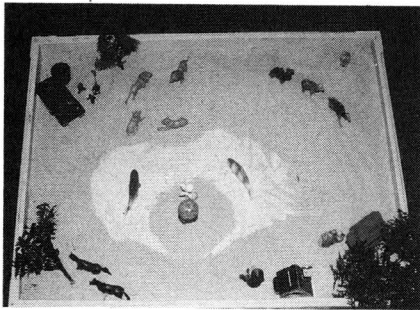
岡田：グループ箱庭療法の試み



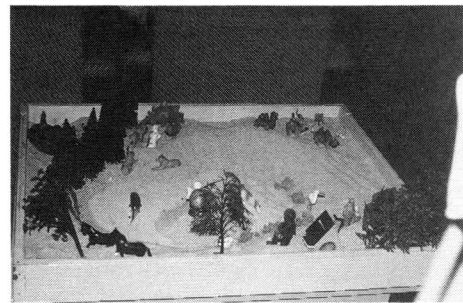
① 1 巡目の作品



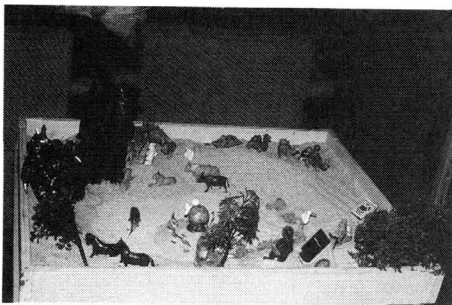
② 2 巡目の作品



③ 3 巡目の作品



④ 4 巡目の作品



⑤ 5 巡目の作品



⑥ 別角度からの 5 巡目の作品

第 7 図 6 回目の作品の制作過程

しちぐはぐに感じるが、本人にとっての意味は尊重しなければならないだろう。

第4巡目：第7図の④は4巡目の作品である。

Bは、藻を多数と水鳥を3羽を置く。Cは、右上の象のまわりに鳥を8羽置く。Dは、老賢者のような、祭司のような人物を上側中央に置く。Aは恐竜2匹と木を移動させ、左上に針葉樹を集める。

各メンバーが玩具を1つ以上使い、何か雑然としてくる。しかし、まだまとまりはある。正位置からみても、逆位置からみてもピッタリくる感じであり、何か不思議に思った。

第5巡目：第7図の⑤、⑥は5巡目の作品である。

Bは、コアラを中央前下の木にとまらせる。Cは、埋めてあった戦車、自動車を掘り出し（トラは埋められたままである）島のまわりに置く。埋められたままのトラの上に（右上）ビーダマを13個と1個の計14個を置く。Dは、牛3頭と十字架（上側やや右）を置く。Aは、怪獣を2匹右上に置く。これで緊張した場面になる。

使用した玩具をまとめたのが第6表である。

第6表 6回目に使用された玩具

制作者	巡目	1	2	3	4	5	合計
B		木を3本	馬を3匹	家とおじいさん	藻5つと水鳥3羽	コアラ	17
C		木1本	こけむした石	戦車, トラ, ソウ, 自動車	8羽の鳥	ビーダマ14個	28
D		2匹の魚	ライオン4匹 (メス2匹, オス2匹)	天使	祭司と2本の木	牛3匹と十字架	14
A		ラクダを3匹	家とヨセフとマリア像	戦車と6人と兵士	3本の木と恐竜2匹	怪獣2匹	20
							79

Bは、「最初に置くのは、置きにくかった」と言っている。Cは、「何も考えずに置けた。島にはならず、つながっているのがいい。切るか切らないか迷ったが」と言う。Aは、「怪獣は全体をあざ笑っている」と言う。AとCは、女性同士ということもあるのかお互いに気持がよくわかるようになってきたという。

戦いの表現が出てきたが、破壊されるという感じではない。むしろ、グループであることが抑制力を働かせていると思う。

テーマは、「あざ笑い」となる。

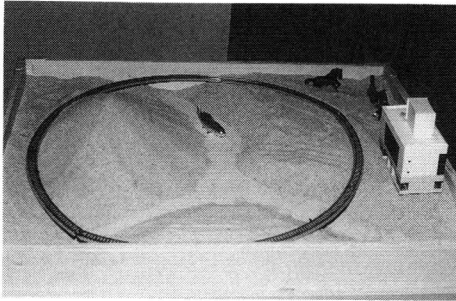
〔第7回目〕

この回の順番は、C—A—B—Dであった。第8図は第7回目の制作過程を示している。

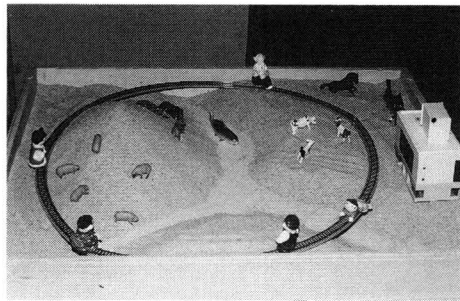
第1巡目：第8図の①は1巡目の作品である。

Cは、砂を大きく動かして、3つの領域に分ける。右側は少し高い山になっている。左上から魚が入ってきているようにする。「コイを置きたかったが、なかったのでこの魚になった」と説明した。また、「川にもっと皆が働きかけてくれるかと思っていたが、余りなかった」（第4巡目にDがカメを川に置いたのみ）Aは、7本のレールをつないで、箱いっばいの円にする。これによって分割感が薄らぐ。「このため、置きやすくなった」という感想があった。Aは、「峡谷を電車

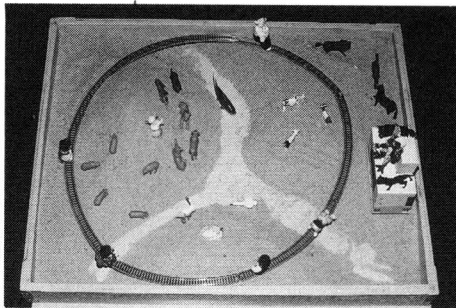
岡田：グループ箱庭療法の試み



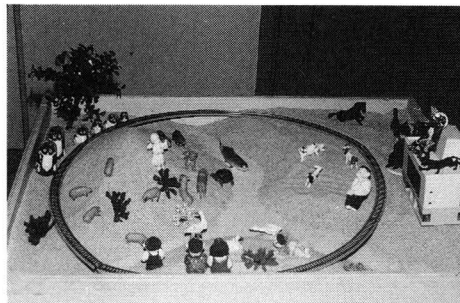
① 1 巡目の作品



② 2 巡目の作品



③ 3 巡目の作品



④ 4 巡目の作品



⑤ 5 巡目の作品



⑥ 別角度からの 5 巡目の作品

第 8 図 7 回目の作品の制作過程

が走っている感じを出したかった」と。Bは、右上に馬を3頭置く。Dは、右側にビルディングを置く。円の中に置くか外にするか迷っていた。「この中にはすぐには置けない感じがしたので、外へ出した」と。Cは、「前回のように分割が作りにくくするのはないかと恐れていた。でもどうしても、山と平地と川を作りたかったから」他のメンバーは、これに対して、「前程分割を意識しなかった」と言う。Aのルールもこの感じを起こさせるのに役立ったと思われる。

第2巡目：第8図の②は2巡目の作品である。

Cは、右側にヒツジを置く。他のメンバーには、ヒツジがイノシシに見えたらしく、置かれた時、「えっ!」と少し驚く。ヒツジとわかり何かほっとした感じであった。後に、ヒツジと明確にわかるように工夫したと。例えば、小木を置いたのはこのためであったと説明していた。メンバーがひとつひとつの玩具に敏感であることがよくわかる。Aは、子どもを5人ルールの上に置く。「子どもが楽しく遊んでいる場面を作ろうと思った」と説明している。また、「ルールで子どもが遊んでいてもそれ程危険でない。ルールの上で遊んでいると動きが出てきて、なかなかいい」と。Bは、牛2頭とヤギ1匹を右上に置く。Dは、トラを3匹左上に置く。

第3巡目：第8図の③は3巡目の作品である。

Cは、天使を山の上に置く。Aは、クレムリンをビルディングの上に置く。Bは、下側の川の近くに水鳥を3羽置く。Dは、左側に雌ライオン2匹とトラを置き、ビルディングの上に、黒ヒョウとオオカミを置く。「ここを少し悪魔的というか、不気味にしたかった」と言う。

第4巡目：第8図の④は4巡目の作品である。

Cは、ルールの上の子どもを手前の砂に4人と右に1人移動させる。花の木も混ぜて小木を6本置く。Aは、左上にルールに沿って、タヌキを6匹置く。Bは、小木を2本山の方に移動させ、空いた左上に大きい木をもってきて、その上に鳥を2羽とまらせる。Dは、煙突掃除の男を右側に、カメを山のすそに置く。カメは、川から上がってきたようにである。「クレムリンはビルディングと調和していて、気に入っている。それをさらに高めるために、煙突掃除の男を置いた」と説明していた。

第5巡目：第8図の⑤、⑥は5巡目の作品である。

Cは、右上に木を4本置く。「皆が木を置かないから置いた」と。Cが木を置くのは初めての印象であり(第1回目と第6回目に置いているが)、他のメンバーから、「今日は変わっていたのところがう」という感想が述べられていた。木のこととおとなしかったことからの感想らしい。Aは、ブテナドロン(恐鳥)2羽を置く。「これは好きだし、名前もよく憶えている。飛ぶようにするにはどうするか少し困ったが、木の上に置いた」と。他のメンバーから、「自由な雰囲気が出ている」と喜ばれた。Bは、右側に人を2人置く。Dは、左上に十字架とキリンとサイを置く。「十字架はよく置くなあ」と自からの感想がある。

使用された玩具をまとめたものが第7表である。

感想として、「初めの方は、誰がどんな玩具を置くかいちいち気になっていたが、だんだん余り気にしなくなって、自分の番の時に『今、こんな作品か』と思いながら置きたいと思っていた。玩具やイメージと合わしながら置いていった。回を追うごとに楽になってきた」と言っていた。

テーマは、「わ」という。「輪」であり、「和」であり、「わあー」という響きでもあると。

今回が最後なので全体としての感想をきくと、Dは、「何か無意識が体験できたみたい」と述

岡田：グループ箱庭療法の試み

べ、Cは、「訓練になった。今まで箱庭を置かなかったクライアントが、この1ヶ月の間に置き初めたりしており、箱庭に自分が開かれたかも」と言っていた。Bは、「面白かった」と、Aは、「面白かったし、他のメンバーに何か心許せるというか、仲よくもなったと思う」と肯定的なものであった。

おわりに

各メンバーが使用した玩具をまとめると、第8表になる。

玩具をひとつずつ置くという原則が大きく破られていることがわかる。玩具を少なくするのが目的でなく、自由に表現することに意味があると考えたので厳しく制限しなかった。当分このままでグループ箱庭を試みるつもりである。しかし、比較のために玩具をひとつに厳しく制限した試みもしておきたいと考えている。この場合は、作品が雑然とはしないであろうが、攻撃やエネルギーギッシュな感じは表現しにくいのではと予想される。

各メンバーの玩具の特徴を調べると、Aは、ワタとモールのようなものを2回使っている。また、玩具数も多い。恐竜や怪獣、爬虫類などもよく使用している。Bは、各回とも一定した玩具数の使用である。(レンジ7~17, 平均12.3) 木が多く、動物も多い。また「3」個置くことが多いようである。Cは、一番多くの玩具を置いている。すでに本文中で触れたが木を置くのが少なかった。ビーダマを2回使っている。Dは、玩具数は一番少なかった。マリアや十字架などキリスト教に関係深い玩具をよく使用している。(1回目を除き毎回)使用される玩具にも何かその人の特徴が出ているようである。

複数の人の作品であるので、まとまりにくい印象は受けるが、一人の人の作品位のまとまりもある。制作されていく過程は、各メンバーの動きではあるが、制作中に起こっている一人の心の中であるとも考えられよう。各メンバーは自分のペースで置きながら、その中に、自分も含めて他のメンバーがすでに置いた玩具からの刺激を受けている。個人としてある面で独立しているが、ある面では入り混っていることになる。これを、箱庭の使用という点から考えると、箱全体が各メンバーに保証されていることが大切である。第4回目に示されたように、自分の領域が狭められることも起こってくるが、ファンタジーグループのフィンガーペインティングと比較すると、わかりよいであろう。フィンガーペインティングでは、模造紙大のケント紙が各人のものとして

第7表 7回目に使用された玩具

制作者	巡回目	1	2	3	4	5	合計
C		魚1匹	ヒツジ5匹	天使	小木6本	針葉樹4本	17
A		レール7本	子ども5人	グレムリン	タヌキ6匹	ブテナドロン2匹と木2本	23
B		馬3匹	牛2匹とヤギ1匹	水鳥3羽	木と鳥2羽	人を2人	14
D		ビルデング	トラ3匹	ライオン2匹とオオカミと黒ヒョウ	カメとエントツ掃除夫	十字架とサイとキリン	13
							67

第8表 メンバーが使用した玩具

回数 メンバー	A	B	C	D	玩具の 個数
1	木, ピーターパン, 恐竜2匹, コウノトリ 2羽, 電話 ⑦	木, 魚, 子ども2人, ベンチ2個, 象 ⑦	お稲荷さんのキツネ, 象, スーパーマン, 木3本, 橋2梁 ⑧	橋, 家, 木, 西洋の 城, 鳥居 ⑤	27コ
2	子ども3人, 鳥居, スーパーマンと子ども も4人, 大ナマズと 海藻, 橋と鳥4羽⑩	木2本, 僧侶, 犬2 匹, 家3軒, 観音像 ⑨	へび, ビーダマ14個, 井戸, 柵, 墓を4つ ⑫	木2本, テトラポット, 船, 走っている 人と電話ボックス, マリア ⑦	53コ
3	ワタ, ムカデ, カエル, クモ, 青虫, 土 器, タヌキ6匹 11+モール	馬3頭, 花2つと花 の木, 家2軒, 人間 3人 ⑪	木片, 石多数, 柵, 十字架 10以上	城, 木を4本, マリ アと木, コウノトリ 2羽と水鳥2羽 ⑪	43以上
4	2人のインディアン, 2匹の野牛, 土器, 10本の木, 花嫁と花 婿, ワタ 17+ワタ	4匹の馬, インドの 神3体, 2個の石, ジープと女性, 家2 軒 ⑬	トーンボール, 船, 飛行機, オバケの首, 小人 ⑤	トラック2台と建物, 2人の人, 2人の人 と草, 家とマリア, リフトカーと救急車 ⑫	47以上
5	木と老人, 家と犬, 水車小屋, 鳥5羽, ダイコン, ニンジン, 海藻 ⑬	木2本と人, 家と丸 太, 牛2頭とヤギと 石3個, 木1本, 花 を2つ ⑭	マンモス, つり人と 丸太, ビーダマ20個, ねている人, 仁王⑮	木2本, カメと草3 つ, 木2本と魚2匹, 水鳥2羽とニワトリ, 牛, 馬, マリアとラ イオン ⑰	69
6	ラクダ3匹, 家とヨ セフとマリア像, 戦 車と兵士6人, 木3 本と恐竜2匹, 怪獣 2匹 ⑯	木3本, 馬3頭, 家 とおじいさん, 海藻 5つと水鳥3羽, アラ ⑰	木, こけむした石, 戦車, トラ, ソウ, 自動車, 鳥8羽, ビ ーダマ14個 ⑳	魚2匹, ライオン4 匹, 天使, 祭司と木 2本, 牛3頭と十字 架 ⑭	79
7	レール7本, 子ども 5人, グレムリン, タヌキ6匹, プテナ ドロン2匹と木2本 ⑳	馬3頭, 牛2匹とヤ ギ, 水鳥3羽, 木と 鳥2羽, 人2人 ⑱	魚, ヒツジ5匹, 天 使, 小木6本, 木4 本 ⑰	ビルディング, トラ 3匹, ライオン2匹, オオカミと黒ヒョウ, カメと人, 十字架と サイとキリン ⑬	67
合計	107+モール+ワタ	85	114 以上	79	385

与えられていることになるが、実際は、各人が、自分の領域を広げることによって、全体をめざす。しかし、他のメンバーも同じように領域を広げてきており、ケント紙全体を使用することはない。ここに衝突が起り、グループダイナミックスが生じてくる。要するに、箱庭では、各メンバーが常に全体をみているために、多人数で作った作品である一人で作ったような印象を与える理由がここにあるのではと主張したいのである。

第2図から第8図までにみられるように、各回の制作過程が提示できた。箱庭療法からみれば、これは邪道であり、許されることではない。しかし、箱庭の制作過程は、明らかにされねばならない重要なテーマである。少しでも害を少なくする方法として、このようなグループ箱庭を試みた。制作過程の研究に少しは役立つのではと思っている。

グループとしても、利用できることが示せたと思う。各メンバーの動き、グループの強まりなど各メンバーがお互いを理解し合えることがわかった。置かれた玩具から受ける刺激、自分が置いた玩具が他のメンバーに与える影響などを体験できる。また、このことは、治療者の訓練とし

でも役立つそうである。

謝辞

参加して下さった4人の方に感謝したい。彼らが喜んで下さったことが支えである。

参考文献

- 河合隼雄 「箱庭療法入門」, 誠信書房 1969
河合隼雄, 山中康裕 「箱庭療法研究 1, 2, 3」 誠信書房 1982, 1985, 1987
岡田康伸 「箱庭療法の基礎」 誠信書房 1984
岡田康伸 「箱庭療法—梅本堯夫編, 教育心理学の展開, 289-295」 新曜社 1985
木村晴子 「箱庭療法」 創元社 1985
岡田康伸 「心理療法家の訓練法の一試み——箱庭療法の物語作り法による——, 甲南大学紀要 文学部編
63 社会学科特集 1-22」 1987
京都大学教育学部心理教育相談室, 臨床心理事例研究, 1~16, 1974~1989
九州大学心理臨床研究, 1~9, 1987~1990